

研究ノート

粘土を題材とした幼児の児童文化財への応用と指導方法の検討について ー保育士養成課程における造形表現活動に関してー

○山本容資*1 田中浩二*2

キーワード：表現、粘土遊び、造形、陶芸、児童文化

1 はじめに

本稿は、至誠館大学における保育士養成課程の基礎技能教育において、特に粘土を用いた授業内容を実践・考察したものである。実践した授業は、2024年度1年次前期の「基礎技能（造形表現Ⅰ）」15回のうちの4回を対象とし、これまでの基礎的な技法のレクチャーを中心としていた粘土造形関連の授業内容を一部変更し、萩焼用の粘土（大道土）を用いた陶芸の演習授業として実施した。

幼児教育における大学等での基礎技能の習得については、文部科学省や厚生労働省が示す要領や指針等によって一定の内容が示されているが¹⁾、その詳細は各大学等によって個別に決定される。各大学の歴史や関連する学部、また所属教員の経験やスキルによって、その内容は柔軟に変化し、各大学の特色を示している。

後述するように、これまで至誠館大学においては比較的安価で加工が容易な材料を用い、保育の現場で実践可能な題材によって授業を構成してきた。しかしながら保育の現場の状況は必ずしも同一ではない。実際の幼児教育の現場では、各要領や指針に沿った一定の統一は見られるものの、保育施設それぞれが掲げる目標や環境はもとより、時間の制限や人員、または予算等によってそれぞれが独自の教育活動を実施していることは明らかである。

大学における造形技術の基礎技能内容を考えたとき、その材料や題材は単に身近で扱いやすいというだけでは無く、生活する土地や文化に関連した特徴的な材料を取り入れることも望ましい²⁾。幼稚園教育要領の「環

境」の領域においては、「(6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化に親しむ」ことが内容として含まれている³⁾。また、「(7) 身近なものを大切にする」「(8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ」ともある。幼児教育における造形表現の材料については、その取扱いの容易さに加えて、子どもたちの生活や地域社会の文化に関連する素材を選定することも望まれている。これらのことから、造形表現の題材として、地域の文化に親しみ、完成品を生活の中で使用し、また表現の段階ともつながりのある陶芸制作は、幼児の造形表現の題材としては相応しいものだと考える。

以上のことから、本稿では実際の大学での授業展開の中に、生活に身近であり、萩市の伝統的工芸品である萩焼⁴⁾と幼児における造形の発達段階の類似性を見出しながら実践を行い、その意味と効果を検討し、至誠館大学における今後の授業展開の在り方や、保育士養成課程に必要とされる基礎技能教育について考察することとした。

2 授業カリキュラムの検討

子どもの造形表現にかかわる保育士にとって、身に着けるべき知識技能とは何か。また、その授業カリキュラムや題材はどのようなものが適切であろうか。

大学等における保育士養成課程においては、厚生労働省によって次の通り指針が示されている⁵⁾。

*1 至誠館大学 非常勤講師

*2 至誠館大学 現代社会学部

【保育の表現技術】保育の表現技術

＜目標＞

1. 保育の内容を理解し、子どもの遊びを豊かに展開するために必要な知識や技術を習得する。
2. 身体表現、音楽表現、造形表現、言語表現等の表現活動に関する知識や技術を習得する。
3. 表現活動に係る教材等の活用及び作成と、保育の環境構成及び具体的展開のための技術を習得する。

＜内容＞

1. 身体表現に関する知識や技術

- (1) 子どもの発達と運動機能や身体表現に関する知識と技術
- (2) 見立てやごっこ遊び、劇遊び、運動遊び等に見る子どもの経験と保育の環境
- (3) 子どもの経験や様々な表現活動と身体表現とを結びつける遊びの展開

2. 音楽表現に関する知識や技術

- (1) 子どもの発達と音楽表現に関する知識と技術
- (2) 身近な自然やものの音や音色、人の声や音楽等に親しむ経験と保育の環境
- (3) 子どもの経験や様々な表現活動と音楽表現とを結びつける遊びの展開

3. 造形表現に関する知識や技術

- (1) 子どもの発達と造形表現に関する知識と技術
- (2) 身近な自然やものの色や形、感触やイメージ等に親しむ経験と保育の環境
- (3) 子どもの経験や様々な表現活動と造形表現とを結びつける遊びの展開

4. 言語表現等に関する知識や技術

- (1) 子どもの発達と絵本、紙芝居、人形劇、ストーリーテリング等に関する知識と技術
- (2) 子ども自らが児童文化財等に親しむ経験と保育の環境
- (3) 子どもの経験や様々な表現活動と児童文化財等とを結びつける遊びの展開

5. 教材等の活用及び作成と保育の展開

(1) 様々な遊具や用具、素材や教材等の特性の理解と活用及び作成

(2) 子どもの遊びやイメージを豊かにし、感性を養うための環境構成と保育の展開

至誠館大学においては、これまで1年次の基礎技能教育としては上記の目標・内容を踏まえつつ、特に材料や用具の扱いを通して、子どもの造形表現の基礎的な知識や技術を取得することに重点を置いてきた。以下は2023年度のシラバス（部分）である⁹⁾。

2.1 2023年度 基礎技能（造形表現Ⅰ）

授業概要・目的

- ①ものの色や形、感触やイメージ等に親しむ経験を通して、造形表現活動の面白さに気付くと共に、子どもの造形表現活動を豊かに展開するために必要な基礎的な知識や技術を習得する。
- ②子どもの発達、特に手の発達について、主に可塑性の高い紙を使った造形表現活動を通して理解する。
- ③手や指、またハサミや糊などの用具の特性や適切な使い方、造形表現活動に必要な造形材料の特性や扱い方を習得し、見通しを持って使いこなせるようになる。

授業計画

- 1 紙を使った造形活動①（折り紙）
- 2 紙を使った造形活動②（切り紙・折り切り紙）
- 3 紙を使った造形活動③（紙の特性を生かした制作）
- 4 紙を使った造形活動④（新聞紙）
- 5 紙コップを使った造形活動（テーブルシアター等）
- 6 牛乳パックを使った制作①牛乳パックの特徴・特性
- 7 牛乳パックを使った制作②パクパク人・帽子・お散歩ワンちゃんを作る
- 8 表現技法の研究①コラージュの技法を使って『ぞうのエルマー』を作る
- 9 表現技法の研究②デカルコマニー・マーブリング・スクラッチの体験
- 10 表現技法の研究③学バチック・フロッタージュ・ブ

ラッシングの体験

- 11 七夕飾りの制作①
- 12 七夕飾りの制作②
- 13 土粘土を使った造形活動
- 14 段ボールハウスの制作
- 15 段ボールハウスの制作②

2023 年度の授業の内容は、授業全体の前半に身近な材料や用具についての取り扱いについて、段階的な指導と実践を行い、後半では個々から全体の制作にシフトする、より幼児教育の現場に沿った授業展開を行っている。幼児教育において、保育士は表現のスペシャリストである必要は無いが、基本的な用具の安全な取り扱いや、幼児の表現活動がスムーズに行えるように材料を選定したり、限られた時間内で活動を組み立てたりする計画性や造形活動に沿った子どもへの働きかけなどが求められる。本学の授業カリキュラムでは、こうした必要とされる技能について段階的に学ぶ授業展開となっている。また授業の材料では、主に紙を中心とした素材を取り扱い、紙コップや牛乳パック、段ボールなど比較的身近な素材を選定している。ここでの身近な素材とは、入手の容易な素材と言い換えることもできる。どこの幼児教育の現場においても一定数の量の確保が見込まれ、比較的安価であり、また危険性がなく安全に取り扱うことのできる材料や用具であること。また、材料の加工方法によって、ある程度の発展や展開が可能であることも重要である。

2024 年度の授業においては、2023 年度の内容を踏襲し、最も基本的な描画スキルの習得とものづくりにかかる用具や材料の取り扱い、子どもの造形活動に沿った働きかけに関する技術等に重点を置きながらも、中盤以降（第 8 回～11 回）では粘土を用いた造形演習に重点を置き、加えて大学内の自然環境を利用した表現活動、また、制作だけではなく表現の評価にも関連する、鑑賞の基礎的なレクチャーを取り入れることとした。以下は 2024 年度のシラバス（部分）である。

2.2 2024 年度 基礎技能（造形表現 I）

授業概要・目的

①ものの色や形、感触やイメージ等に親しむ経験を通して、造形表現活動の面白さに気付くと共に、子どもの造形表現活動を豊かに展開するために必要な基礎的な知識や技術を習得する。

②子どもの発達、特に触覚を意識した造形活動について理解し、基礎的な知識や技術を学ぶ。

③手や指、またハサミや糊などの用具の特性や適切な使い方、造形表現活動に必要な造形材料の特性や扱い方を習得し、見通しを持って使いこなせるようになる。

授業計画

- 1 オリエンテーション（グループワーク）
- 2 人物表現①顔の描画基礎
- 3 人物表現②人物の描画基礎
- 4 人物表現③運動する人物の表現【課題制作】
- 5 クラフト表現①基礎的な道具の使用方法
- 6 クラフト表現②素材の扱い方
- 7 クラフト表現③メッセージカードの制作【課題制作】
- 8 造形表現①粘土の扱い方
- 9 造形表現②粘土の加工方法
- 10 造形表現③触覚を意識した造形表現
- 11 造形表現④萩焼自由制作【課題制作】
- 12 環境造形①フロッタージュ
- 13 環境造形②身の回りのバランス
- 14 鑑賞基礎①見ること、きくこと、話すこと
- 15 鑑賞基礎②対話鑑賞【レポート提出】

3 題材としての陶芸

幼児教育の現場に土粘土を使用した陶芸の活動を取り入れることは、その準備や片付け、粘土の管理等を考えると実際には容易ではない⁷⁾。体験としての土や砂を使った造形遊びとは異なり、陶芸作品を制作するといった活動は、その環境を整える面から考えても実際には困難だと言える。しかしながら、至誠館大学

が位置する萩市内ではいくつかの保育施設が萩焼を保育に取り入れており⁸⁾、それを特色としている保育施設もある⁹⁾。萩市内には窯元をはじめ、陶芸の体験施設や愛好会などの支援団体なども多く、幼児教育に萩焼を取り入れることは比較的容易な環境にあるのではないだろうか。

3.1 幼児の表現と伝統文化

幼児の造形活動とは、本来は幼児の日常における体験から発生し、表現の欲求に基づく活動である¹⁰⁾。保育者は、幼児にとって可能な限り身近な素材を選定し、驚きや発見をもって表現する意欲を高める題材を組み立てようとしてきた¹¹⁾。今回の授業実践では、幼児にとって陶芸における造形活動が単に地域の文化体験や、活動の自由が少ない形式的な活動とならないよう、以下の点に留意して授業の組み立てを行うこととした。

(1) 子どもの意欲を引き出すために

粘土による造形表現については、幼児の身体性との関わりなどが指摘され、その有意性が示されている¹²⁾。粘土造形の題材を陶芸としたが、実際の講義では現場での子どもたちの粘土とのふれあいや触覚性を味わうために、粘土の基本的な練り方やオブジェ的な作品制作も授業に取り入れた。

(2) 造形の段階と陶芸の技法の類似性

子どもの造形表現を考えたとき、保育者は子どもたちの目的に合わせた示唆や働きかけをすることが求められる。特に粘土造形においては、その可塑性の高さから表現の自由度が高い反面、子どもが制作の目的にあった造形表現（手の操作）を見つけることに苦労することにもつながることがある¹³⁾。作品を制作する「目的」と制作時の「手の操作」を関係させ、どのような手順で完成に至るかを考え、保育者にはそれらに合わせた働きかけが重要であることから、中川（2001）の研究及び、神谷睦代（2009）の実践を参照しながら¹⁴⁾、次の4段階と陶芸の基本的な段階と関連させ、本稿の授業展開として組み立てることとした。

4 講義の実際

第8回から第11回の講義内容及び考察は以下のとおりである。授業については、粘土造形の段階を以下の4つに分け、それぞれを陶芸の制作技法にあてはめながら指導を行った。

(1) 触覚の発見：粘土の荒練りや触覚体験

(2) 触覚を基にした簡易造形：はしおき

(3) 目的をもった造形：ヒモづくり、板づくり

(4) 用途をもった造形：たまづくり、ロクロ

特に(1)(2)については、陶芸の作品制作の前段階として粘土にしっかりと触れ、手のひらの操作によって変化する粘土の可塑性の示唆や、立体的な視点で制作をすすめる視点を意識することとした。

4.1 授業対象

学部学科：現代社会学部 現代社会学科

学年・人数：1年生・6名

授業時間：4時間（全15時間の内）

4.2 講義内容

4.2.1 1 粘土の扱い方について

幼児教育の現場での水粘土の取り扱いにおいては、制作前の準備、使用した道具の後片付けまでを考えて行う必要がある。特に粘土に発生するカビや、土ぼこりといったものに注意が必要であるが、粘土そのものを扱う作品制作の時間を1回のみとしたり、すでに練られている粘土を購入したりすることで、そうした手間は省くことが可能である。また粘土の産地でもあることから、10 kg 1000 円程度で購入することができ、幼児用粘土が 500g200～500 円程度¹⁵⁾であることを比較しても、およそ10分の1程度の価格で粘土の入手が可能であることも分かった。

ここでの授業内容は、最も基本的な粘土の準備と片付け、粘土の練り方や使用する道具についての説明方法などについてレクチャーを行った。



(写真) 粘土を練って活動に使用できるようにする

また、各自準備した粘土を使用した箸置き制作を行った。子どもの粘土造形における保育士の働きかけの方法として、粘土造形の4段階のうち、特に触覚を意識した粘土造形や簡易な造形の段階についてレクチャーした。

(学生の様子)

基礎技能（造形表現Ⅰ）については、全体を通して実技演習を伴う授業であり、履修生の中には当初から表現に対して苦手意識のある発言が多かった。学生によっては授業への意欲や表現技術に差があったが、粘土表現に関してはあまり苦手とするような発言は無く、終始前向きな姿勢で授業に参加している様子がうかがえた。触覚を伴い、自身の手の形や動きがそのまま表れる粘土表現は、学生にとっても意欲を生む題材であることが分かった。

4.2.2 2 ヒモづくり、板づくりによる陶芸表現

陶芸表現においては、基本的には完成後に食器として「使える」ことが重要である。埴輪やレリーフ作品のような飾れる作品もあるが、完成後に食器として使うことを前提とした作品制作を行った。

この授業では陶芸の最も基本的な造形技術であるヒモづくりと板づくり（タタラ）を用いて、簡易な器とレリーフ制作を行った。レリーフについては粘土を板

状にカットする技法の紹介に加え、教室の外に出てお気に入りの葉っぱを探し、それらを粘土に押し付けて型を取る技法も紹介した。これらの粘土を加工する技法や葉っぱなどを押し付ける方法は、子どもの造形表現の初期にも活用できる技法であり、陶芸制作と合わせて造形の段階の解説や技法のレクチャーも行った。

手ひ練りによる器制作では、ヒモ状にした粘土を積み上げながら、指と手のひらを用いて器の形を作った。これは子どもの造形表現の内「ひねりだし」と呼ばれる造形活動と同じものであり、例えば動物の顔や手足を一つの塊から作ったりする行為との類似性をレクチャーに加えて制作を行った。



(写真) 板づくり、ヒモづくりによる演習

(学生の様子)

板づくりのレリーフにおいては、粘土を練る→粘土を立方体にまとめる→粘土をナイロン糸で切る、という工程を経て、ほぼ全員が同じ板状の粘土を制作することになる。粘土板が完成後、皆で教室の外に移動し、お気に入りの葉っぱを探して粘土に押し付けることによって、それぞれが個性的なレリーフを作ることができた。また、粘土も葉っぱも、基本的には素材そのものを使用して作品制作を行うため、表現することについて抵抗のある生徒にとっても、比較的取り組みやすい題材のように感じた。ヒモづくりによる器制作については、各自の手の大きさや手際の良さしによって

差が出ることになったが、手近なキッチンペーパーで簡易のロクロをつくったり、不要な粘土をカットしたりする道具を準備するなどして、全員がある程度の器の形をつくることができ、幼児教育の現場でどのような道具が必要であるか、実践を通して検討することになった。



（写真）ペーパータオルによる簡易ロクロ
葉っぱを押し付けて模様を写し取る

4.2.3 3 ロクロによる器づくり

講義の3回目では、至誠館大学で1台のみある電気ロクロを使用した陶芸制作を行った。幼児教育の現場で電気ロクロを使用した活動を行うことは人数や管理の面から困難であることが予想されるが、電気ロクロ成型はこれまでに学習したヒモづくりや手び練りの延長上にあり、また特に手のひらの感覚や操作による造形であることから、粘土造形の発展段階の教育としては適していると考えることができる。粘土を引っ張って造形するのではなく、押し固めながら制作すること、粘土を指の感覚で確かめながら見ること、完成後にどのように使用するか(また誰に使ってほしいか)など、いくつか造形のポイントを指導しながら制作を行った。

（学生の様子）

電気ロクロによる陶芸制作については、テレビなどで一度は見たことのある陶芸の典型のような制作方法である。ロクロ制作は基本的には手をほとんど動かさずに作品が出来上がるように見えるため、簡単に作品ができると思っていた学生も見受けられた。自身のわずかな手の動きや力の入れ具合で大きく形が変化するロクロ制作は、なかなかうまく成型することができず、苦戦する学生も見受けられた。手の操作による粘土の



（写真）ロクロによる制作と作品

形状の変化は、幼児の造形表現による初期段階との類似点もあり、学生は自身の作品の変化と合わせてレクチャーを受けることとなった。

4.2.4 4 釉薬ペンによる施釉

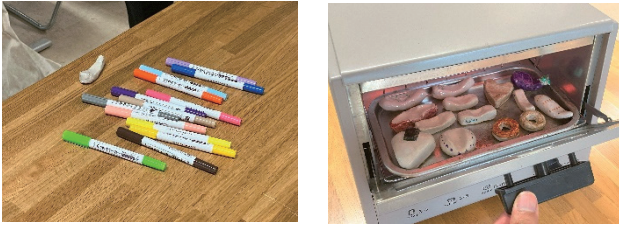
粘土造形最後の授業は、制作した作品の釉薬掛け(着色)を行った。事前に素焼き→萩焼釉薬→本焼きを終えた各作品を用意し、作品下部分の高台を仕上げるとともに、箸置ききの釉薬掛けを専用の釉薬ペンにて行った。釉薬ペンは200度で30分程度焼成することで定着する陶芸専用のペンであり、実際の幼児教育の現場でも使用可能である。今回は教室内の設備にあった、オーブントースターで焼成した。



（写真）使用した釉薬と本焼成の様子

（学生の様子）

立体作品に着色するという経験に躊躇する学生が多かった。幼児期教育段階から初等中等教育を見ても、立体の作品に着色を行うタイミングは少ないのかもしれない。釉薬ペンは焼成するまでに何度もやり直しが可能なので、立体に着色する経験や、実例の示唆があ



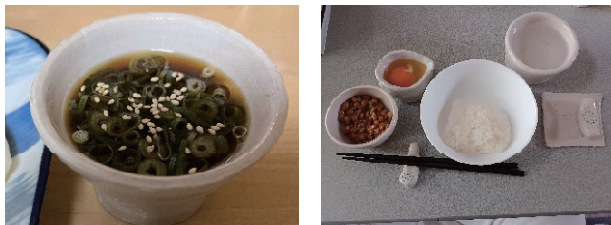
(写真) ペンタイプの釉薬がけと焼成の様子

る程度必要なのではないかと思われた。

5 まとめ

5.1 完成品の使用

学生には制作した器を使用し、その写真を提出するように求めた。以下は提出された写真である。



(写真) 実際に作品を使用してもらった写真

5.2 アンケート

授業の最後に、陶芸の授業を含め全体(15回)を通して学生にアンケートを実施した。回答は以下の通りである。

(回答1)

この授業を通して思ったことは、絵の具や鉛筆などの正しい使い方が学べて良かったと思いました。また、授業を通して自然と関わることが多く、私はあまりアクティブな方ではないので外に出て自然と触れ合う機会がないので、自然と触れ合えて良かったです。また、萩焼きなどの萩の伝統にも触れられたので良かったです。私は、想像力があまりないので、この授業は少し苦手ですが、みんなで楽しく受けることができて良かったと思いました。

(回答2)

陶芸作品を実際に使用してみて、大きさに食べ物にはあまり使えなかったけど、ソースとかタレの調味

料を入れるのにはちょうど良かったので、これから何か食べるときには使っていきたいです。前期の授業では特に絵の具で自由に色を作ったり、クレヨンで適当に線を引いて、はらぺこあおむしを作ったりしたのが楽しかったです。この授業では、折り紙や段ボール、クレヨンなど日常で普通に使っているもので違う使い方をしていて、こんな使い方もあったんだと驚きました。ハサミやカッターなどの正しい使い方を知れて良かったです。後期でも頑張って作品を作ったりしたいです。

(回答3)

思ったより丈夫で使いやすかった。授業ではやった事のない事に挑戦できて良かった。

(回答4)

この前の授業で作った陶芸作品を使った感想は、いままでで、萩焼を作ったことはありますが、お皿とかではなく、置物しかつくってなかったため、今回食事の時に使えるものをつくることができて良かったです。ごはんの時に使い、いつも食べるごはんよりももっと、美味しくなりました。また、食器を新しく買おうか迷っていたため、授業でつくれてうれしかったです。前期の授業を通して、大学は90分授業でつまらないなと感じることが多く、寝てしまうこともたくさんありましたが、造形表現では、色々な作品をつくることができたり、僕はものをつくるのが好きなため、楽しく受けることができました。後期でも、造形表現はとっているため、いままで習ったことを生かしてより良い作品が作れるようになっていきたいです。

5.3 評価と課題

授業の実践を通して、以下のような課題が見えた。

(1) 粘土表現の段階と陶芸表現技法の類似性と差異
陶芸の基本的な技法(ヒモづくり、板づくりなど)によって制作を進めることによって、どの生徒でも一定の器の形を制作できることがわかった。これは自由な作品制作に比べ一定の目標を設定することが可能で

あり、幼児教育の現場においても「完成することができた」といった目標を達成するといった実感を味わえるのではないかと。しかし陶芸の技法を使用すると形状がある程度限定されるため、制作する個々の自由度や表現の広がりにはバリエーションが少ないことが課題である。また、陶芸制作によって子どもの自由度が制限されるという面と、制限を設けることで作品の完成や目的を持った造形活動ができることもわかった。実際の保育の現場では、子どもの造形表現の自由度の担保と、保育者のはたらきかけのバランスが求められる。

（２）箸置き制作の釉薬掛け等について

今回の作品の釉薬掛けについては、統一して白萩釉薬を使用した。時間の関係上釉薬掛けは授業時間内に行わなかったが、時間的に余裕があれば釉薬掛けも授業内で行いたい。釉薬掛けそのものは単純な作業であるが、粘土から磁器に変化する過程を体験しておくことで作品表現に釉薬の要素も加わり、より計画的な作品制作が行えるのではないだろうか。また箸置きは釉薬掛けについては、授業内で釉薬ペンを使用した着色を行ったが、これは通常の陶芸窯による焼成を要しない簡略的な焼成で色の定着が可能であり、保育の現場に置いても実践が可能なものであると思われた。

（３）指導方法の在り方について

今回は学生数６名に対して１名の講師が演習の指導にあたった。また指導内容については粘土造形の段階に合わせて陶芸の技法を紹介し、ある種の手順を追うような形で授業を進めることとなった。作品の制作そのものを目的とはしていないが、粘土を扱った授業については、授業内で示した段階の他にも、個々で技法や加工方法を発見することを目指している。加えて、その過程で、保育の現場で各自が指導に当たる際のヒントを見つけてもらいたいと考えている。今後の指導法に当たっては、基本的な造形の段階の指導や陶芸技法のレクチャーと合わせて、学生が個々に考え検討し、

自分なりの陶芸作品を制作する時間も確保することが望ましいと思われた。

幼児教育の過程において、伝統文化や地域産業に触れることは重要ではあるが¹⁰それが単なる見学や形式的な体験にとどまることは避けたい。それらの体験の目的は文化や産業の形式的な体験ではなく、一義的には幼児の個々の造形表現にとって有益でなければならない。今後、継続したさらなる実践が必要であるとともに、実際の保育の現場や多人数を想定した陶芸のレクチャー方法、粘土を取り扱う環境等についても、先行研究の調査とともに取り組んでいきたい。

謝辞

本稿の執筆にご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

【引用文献】

- 1) 文部科学省（2016）「幼児教育部会における審議のとりまとめ」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/sonota/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377007_01_4.pdf（アクセス日 2024.10.05）
- 2) 泰田久史（2021）「地域の伝統文化を題材とした教材の可能性」『宮崎学園短期大学紀要』13, 135
- 3) 文部科学省、厚生労働省、内閣府（2017）『幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年度告示）』チャイルド本社, 18-19
- 4) 経済産業省（2022）「伝統的工芸品一覧」
<https://www.meti.go.jp/press/2022/11/20221116001/20221116001-2.pdf>（アクセス日 2024.10.05）
- 5) 全国保育士養成協議会（2017）「保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について」
https://www.hoyokyo.or.jp/http://www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/reference/29-3s2.pdf（アクセス日 2024.10.05）

- 6) 至誠館大学「シラバス（2023 年度、2024 年度）」
<https://www.shiseikan.ac.jp/guidance/disclosure>（アクセス日 2024.10.05）
- 7) 前嶋英輝（2016）「幼児のための粘土遊び設備の構築」『吉備国際大学研究紀要第』26, 13-14
- 8) 山口新聞電子版（2023）「まなざし真剣 萩焼作り 萩光塩学院幼稚園、卒園記念に」
<https://yama.minato-yamaguchi.co.jp/e-yama/articles/66801>（アクセス日 2024.10.05）
- 9) 萩幼稚園『保育の特徴として萩焼の体験学習』
<https://hagiyo.ed.jp/about>（アクセス日 2024.10.05）
- 10) 堀内秀雄, 杉本亜鈴（2007）「幼児の造形表現における素材・材料の研究」『東京成徳短期大学紀要』38, 57-65
- 11) 武末裕子, 古屋祥子（2021）「粘土による造形活動の有効性について」『教育実践研究』26,115-116
- 12) 南陽慶子（2012）「粘土遊びにおける表現と身体性についての一考察」『お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科学論集』15, 247
- 13) 中川織江（2001）『粘土造形の心理学的・行動学的研究』風間書房, 11
- 14) 神谷睦代（2009）「幼児の粘土造形：基礎的な技能の習得及び題材（テーマ）についての実践と検証」『美術教育学：美術科教育学会誌第』30, 176
- 15) ミツケル（2023）「油粘土はどこに売ってる？取扱店や平均的な値段を紹介します」<https://price-feel.com/oil-clay/>（アクセス日 2024.10.05）
- 16) 徳田多佳子ほか（2023）「地域の文化や伝統を生かした子どもたちの主体的な遊び—保育者の環境構成に着目して」『日本女子大学大学院紀要. 家政学研究科・人間生活学研究科』29, 154
- [参考文献]
- 1) 佐藤忠良（1997）『触ることから始めよう』講談社
- 2) 永守基樹ほか（1999）『幼児造形教育の基礎知識』建帛社
- 3) 光武幸（2012）「伝統的工芸品産業の活性化に寄与する学校教育の可能性」『消費者教育』32, 221-230
- 4) 横田咲樹, 高橋慧（2022）「幼児期における造形的思考力への着目と造形活動を捉える視点」『美術教育研究』54, 385-392
- 5) 三浦乃, 小江和樹（2016）「幼児の粘土を用いた造形活動の支援についての研究（1）」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』25, 61-69
- 6) 江村和彦（2023）「大学生の美術・芸術に関する興味・関心についての考察Ⅰ～保育者・教師を目指す学生の美術に関する認知度について～」『日本福祉大学子ども発達学論集』15, 17-24
- 7) 前嶋秀輝（2019）「粘土遊びの情報と評価法」『吉備国際大学研究紀要（人文・社会科学系）』29, 61-72